

国指定史跡
綴喜古墳群

てんりやま 天理山3号墳

薪山垣外

今から約1,600年前に、3基の古墳から構成される天理山古墳群が、現在の一休寺の裏山に造られました(図1)。天理山3号墳は令和6年度の発掘調査によって、大きさが82mの前方後円墳ということが明らかになっています。



図1 位置図

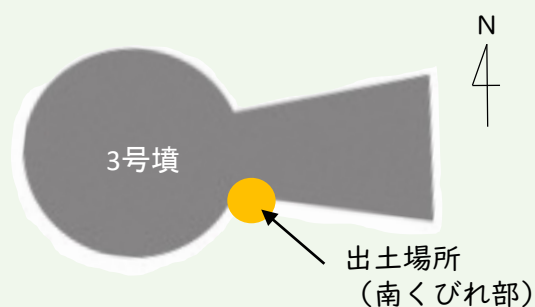


写真1 立てられた埴輪を見つけた時のようす
大量の転落石で埴輪が埋まっている



写真2 転落した葺石や土を取り除いた後のようす

天理山3号墳の発掘調査では、古墳の周りに埴輪が立てられている状況を確認しました。左の写真は発掘調査現場で埴輪が出てきた時のようすです。写真1は1,600年の間に古墳の上から落ちてきた葺石(転落石)の下に埴輪が埋まっている状態です。写真2は転落石や土を取り除き、古墳時代の状況に戻した時のようすです。



天理山3号墳の時代は
このあたり!



古墳の後円部からも埴輪が出土しました(写真3)。埴輪は直径が約36cmで、上の部分は欠けていましたが、いちばん下から約38cmの高さまで残っていました。大きな埴輪や大量の葺石を丘陵上の古墳まで運ぶのは、かなりの労力が必要だったと考えられます。古墳づくりは当時の一大事業で、古墳を作ることができた人物は地域のリーダー(首長)であったとみられています。



写真3 立てられた埴輪と葺石を横から見たようす

ここに注目！ 学芸員の観察ポイント

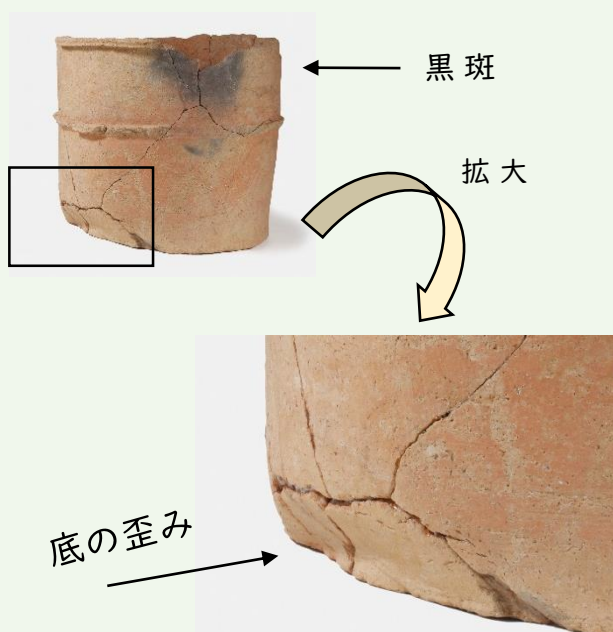


写真4 くびれ部から出土した埴輪

くびれ部から出土した埴輪は、底の部分に歪みがみられます(写真4)。粘土を積み上げて埴輪を作るとき、粘土に含まれる水分が下へ落ちて底が乾きにくい状態になり、粘土の重さにより変形したと考えられます。また埴輪側面の黒くこげた部分は、野焼きした際に藁などが燃焼して埴輪に吸着し、黒い痕跡となって残ったものとみられます。